

[研究論文]

ボランティア活動参加と動機の付与1

－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から4－

塚本 利幸¹⁾・舟木 紳介¹⁾・橋本 直子²⁾・永井 裕子¹⁾

1. はじめに

地域・社会を誰にとっても暮らしやすいものにしていくための方途の1つとして、ボランティア・市民活動（NPOなど）の取り組みを充実させることが注目されている。ボランティア・市民活動の活性化に向けた施策や取り組みに関して、1）ボランティア活動に関する研修会、講演会、催しなどを開催し、具体的な活動の内容や方法、やりがいや楽しさ、社会的な意義などを紹介し、意識啓発を通して、参加意欲の向上を目指す内的な動機付けに照準したモチベーション・アプローチ（内側からの動機付け）と、2）活動への参加になんらかの対価を付与するといった形で、外的な誘因によって参加を引きだそうとするインセンティブ・アプローチ（外からの動機付け）、に大別することができる。

本稿では、ボランティア活動の活性化のための施策や取り組みに関して、1）研修会、講演会、催しなどへの参加経験、2）ボランティア活動に対価が払われることへの評価と、ボランティア活動への参加経験、今後の参加の意向などとの関係に焦点をあてて、福井県立大学ボランティア研究会が実施したボランティア活動に関するアンケート調査のデータの分析を進めていく。

2. アンケート調査の概要と研究方法

福井県はボランティア活動が盛んで、「平成28年社会生活基本調査」によれば、福井県の行動者率は32.2%で、全国平均の26.0%を大幅に上回り、全国第9位となっている（図1）。

福井県立大学ボランティア研究会では、ボランティア活動参加の実態を明らかにする目的で、20歳から80歳までの福井市在住の一般住民から無作為抽出¹⁾した4000人を対象に「ボランティア・市民活動（NPOなど）に関するアンケート」を郵送法で、2019年3月に実施した²⁾。有効回収数は1236件（回収率30.9%）であった。回答者の基本属性（性別と年代）は表1の通りである。上記の調査データを、統計的な手法（クロス集計とカイ2乗検定、残差分析など）を用いて、分析する。

受付日 2023.05.15

受理日 2023.07.07

所属 1) 福井県立大学・看護福祉学部、2) 関西学院大学・人間福祉学部

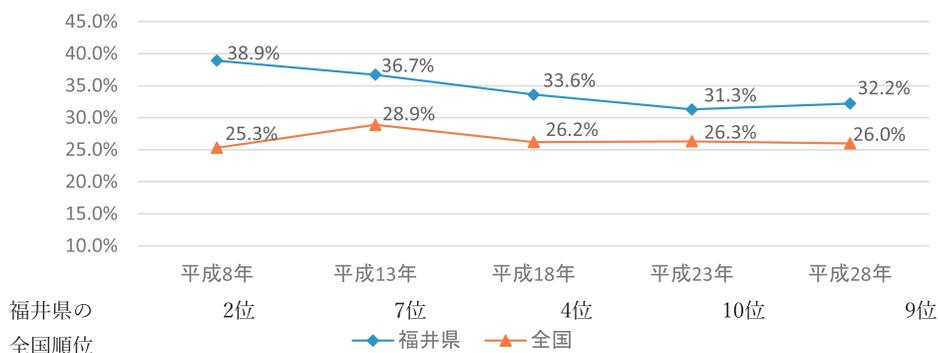


図1 ボランティア活動の行動者率の推移（「社会生活基本調査」総務省より作成）

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリー	%
性別 (n=1227)	男性	40.0
	女性	59.3
	答えたくない	0.7
年齢 (n=1218)	20歳代	6.4
	30歳代	9.6
	40歳代	17.5
	50歳代	17.2
	60歳代	25.5
	70歳以上	23.7

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、調査票の冒頭部分で、調査の趣旨と内容を説明し、協力を求め、調査票の返送は対象者の自由意思に委ねた。調査票は無記名であり、個人の特定は原理的に不可能であるが、データの入力、管理にあたってはコード化をおこない、個人を特定できないよう厳重な管理をおこなった。分析および分析結果の公表に際しては、全体として集計し、統計的手法を用いた処理をおこない、個人の回答内容が特定されることのない手法を採用する。

4. 研修会、講演会、催しなどへの参加経験とボランティア活動参加の関係

1) 研修会、講演会、催しなどへの参加経験

今回の調査では、ボランティア活動に関する研修会、講演会、催しなどへの参加経験の有無（以下では、「研修会などへの参加経験」と表記）について尋ねている。回答結果をまとめたも

のが図2で、回答者の32.5%がそうした経験を有している。

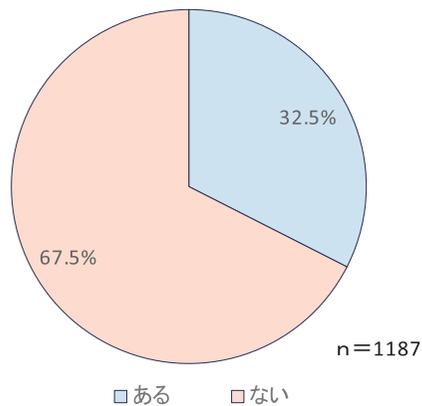


図2 研修会・講演会・催し等への参加経験

性別との関係、年代との関係をまとめたものが図3、図4である³⁾。性別によって参加経験に違いがみられないのに対して、年代に関しては「20歳代」、「30歳代」で参加経験のあるものの比率が低く（1%水準で有意）、「70歳以上」で高い（1%水準で有意）。後述するように、研修会などへの参加の経緯に関して、「地域で参加」と回答したものの比率が突出して高い。年代による参加率の違いは、地域との結びつきの濃淡（若年層で薄く、シニア層で濃い）を反映したものであると推察される。

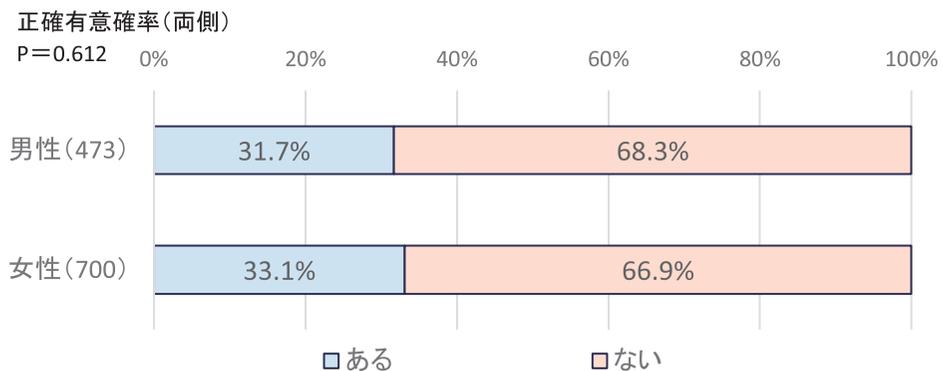


図3 性別×研修会などの参加経験

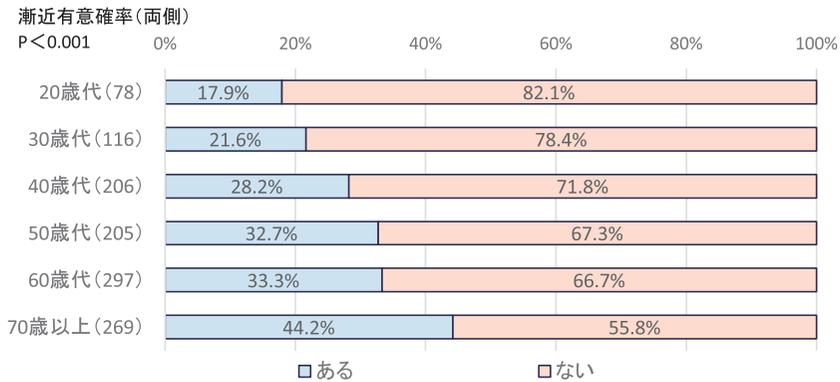


図 4 年代×研修会などの参加経験

2) ボランティア活動への参加経験との関係

「研修会などへの参加経験」との関係进行分析する前に、ボランティア活動への参加状況に関して、全般的な傾向を確認しておきたい。参加経験についてみると、回答者の36.5%が過去1年間に参加経験があり、それ以前に参加経験のあるものが24.1%、参加経験のないものが39.4%となっている（図5）。今回の調査では過去1年間の活動参加の有無について11の分野ごとに尋ねており、参加した活動の種類を算出することができる。それをまとめたものが図6である。また、過去1年間に活動した回数についても尋ねており、それをまとめたものが図7である。種類に関しては「1種類」のものが5割程度で最も多く、これに「2種類」の4人に1人程度が続く。回数に関しては「年に2～3回」のものが4割で最も多く、「年に1回」、「年に4回以上」、「月に1回以上」のものがいずれも2割程度である。

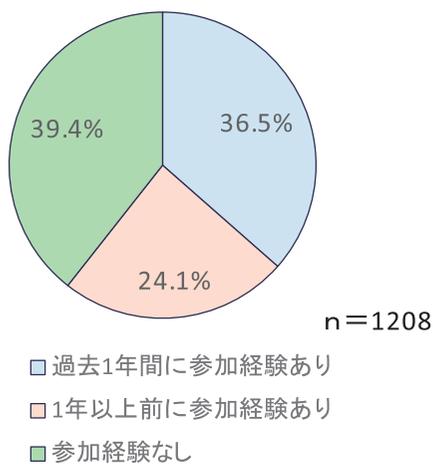


図 5 ボランティア活動への参加経験

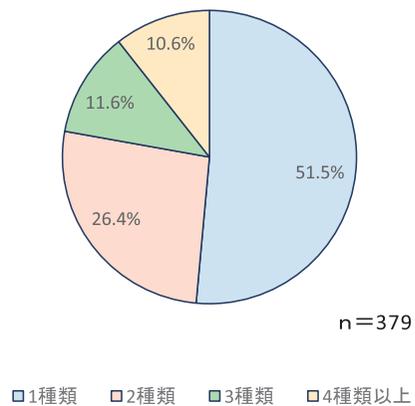


図 6 参加した活動の種類

ボランティア活動参加と動機の付与

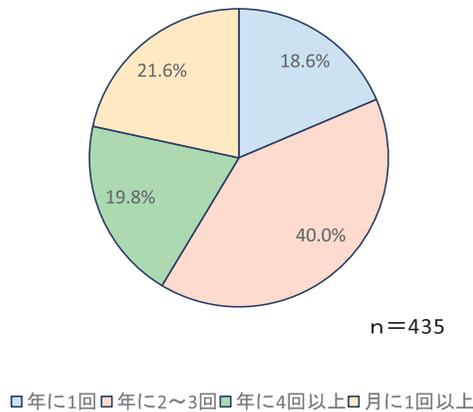


図7 活動の回数

「研修会などへの参加経験」と「ボランティア活動への参加経験」の関係を確認したものが図8である。

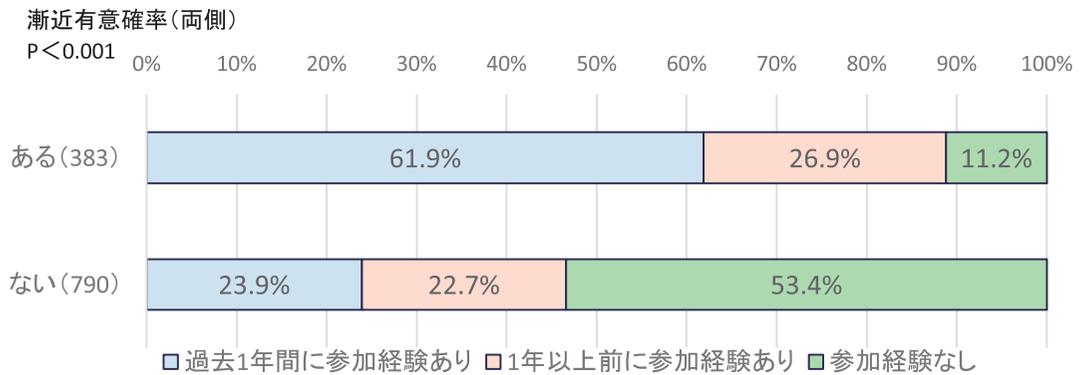


図8 研修会などの参加経験×ボランティア活動の参加経験

過去1年間にボランティア活動へ参加経験のあるものは、研修会などへの参加経験があるもので61.9%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは23.9%と2.5倍以上の違いがあり、1%水準で有意差がある。逆に、ボランティア経験の参加経験がないものは、研修会などへの参加経験があるもので11.2%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは53.4%に達し5倍近くの違いがあり、やはり1%水準で有意差がある。

過去1年間にボランティア活動への参加経験のあるものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加した活動の種類」の関係を確認したものが図9である。

漸近有意確率(両側)

P<0.001

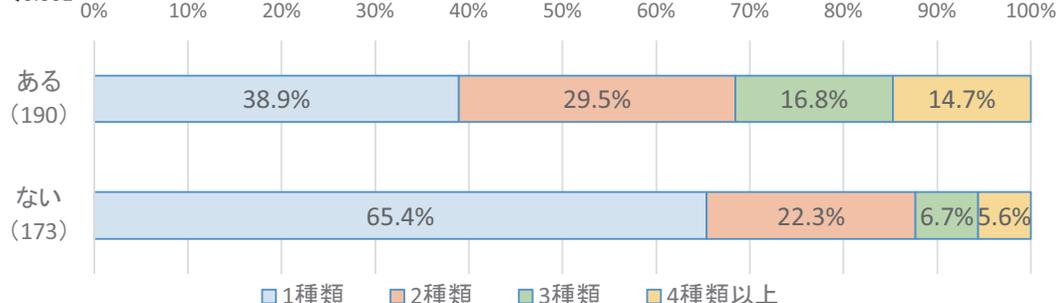


図9 研修会などの参加経験×過去1年間の参加活動の種類

過去1年間に「1種類」の活動にだけ参加したものは、研修会などへの参加経験があるもので38.9%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは65.4%と2倍近くの違いがあり、1%水準で有意差がある。「3種類」の活動に参加したものは、研修会などへの参加経験があるもので16.8%、ないもので6.7%、「4種類以上」の活動に参加したものは、研修会などへの参加経験のあるもので14.7%、ないもので5.6%と、いずれも3倍近くの違いがあり、1%水準で有意差がある。

過去1年間にボランティア活動への参加経験のあるものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加した活動の回数」の関係を確認したものが図10である。

漸近有意確率(両側)

P<0.001

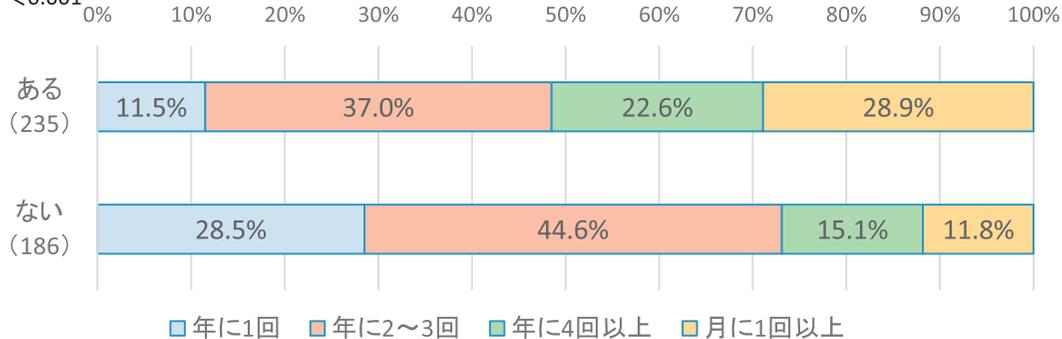


図10 研修会などの参加経験×過去1年間の活動の回数

過去1年間に「年に1回」だけ活動に参加したものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので11.5%なのに対して、ないものでは28.5%と、ないもので2.5倍近く高い(1%水準で有意)。逆に、「月に1回以上」の頻度で活動に参加したものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので28.9%、ないもので11.8%と、あるもので2.5倍近く高い(1%水準で有意)。

研修会などへの参加経験があるものは、参加経験がないものに比べて、ボランティア活動への参加経験が豊富で、参加している活動の種類が多く、活動の頻度も高い、という傾向が確認される。

1) 研修会などへの参加によって、ボランティア活動への参加が促進されるといった影響関係を想定することも可能であるが、2) ボランティア活動参加へのモチベーションの高いものほど、研修会などへの参加意欲も旺盛であるといった影響関係も想定可能である。3) 双方向の影響関係がスパイラル的に働いている可能性、4) 他の要素を媒介とした疑似相関である可能性、なども払拭できない。今後の研究課題としたい。

3) ボランティア活動への今後の参加の意向との関係

「研修会などへの参加経験」との関係进行分析する前に、ボランティア活動への今後の参加の意向に関して、全般的な傾向を確認しておきたい。回答者の63.9%が今後、ボランティア活動に参加してみたいと考えており、36.1%が参加したくないと考えている(図11)。今回のアンケート調査では、今後のボランティア活動への参加の意向を有するものに、11の分野から参加したいと思うものをすべて選んで回答してもらっている。参加したいと考えている活動の種類を算出してまとめたものが図12である。参加したい回数についても尋ねており、その結果をまとめたものが図13である。

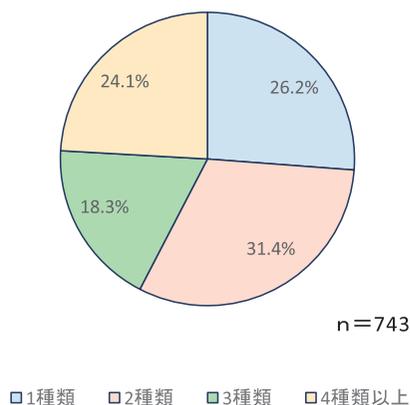
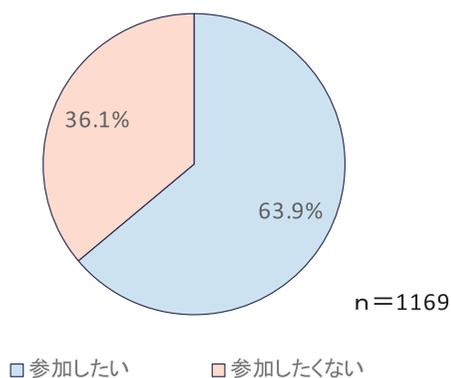


図 11 ボランティア活動への参加の意向

図 12 参加したい活動の種類

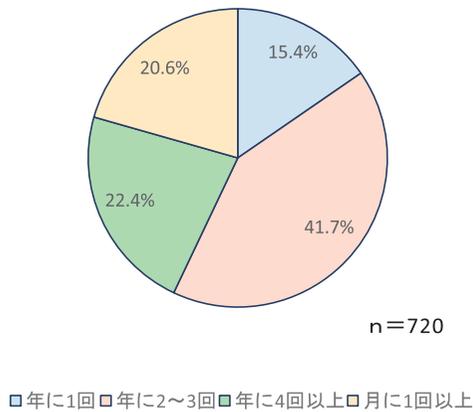


図13 参加したい活動の回数

参加したい活動の種類に関しては、「2種類」のものが一番多く31.4%を占める。以下は僅差であるが、「1種類」(26.2%)、「4種類以上」(24.1%)、「3種類」(18.3%)の順に比率が高い。過去1年間に実際に参加した分野の種類(図6)に関しては、「1種類」が4割程度、「2種類」が3割程度で、「3種類」、「4種類」は15%以下となっている。回数に関しては、「年に2~3回」という回答が最も多く4割程度、「年に4回以上」と「月に1回以上」が2割程度で、「年に1回」が最も少なく15.4%となっている。過去1年間の実際の参加回数(図7)に関しても、おおよそ同様の分布となっている。種類に関しては、今後の意向と実態のズレが大きく、回数に関しては小さいというコントラストが確認できる。参加したことのない分野で新たに活動を始めるよりも慣れている分野で参加の回数を増やす方が、ハードルが低いのかもしれない。

「研修会などへの参加経験」と「今後のボランティア活動への参加の意向」の関係を確認したものが図14である。

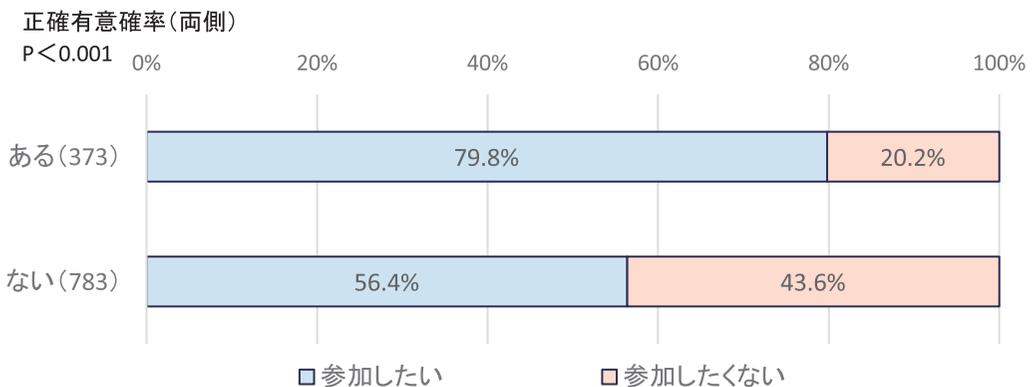


図14 研修会などの参加経験×今後の参加の意向

ボランティア活動参加と動機の付与

今後にボランティア活動へ参加の意向を有するものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので79.8%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは56.4%と1.5倍程度の違いがあり、参加経験のあるもので高く、1%水準で有意差がある。

今後、ボランティア活動に参加したいと考えているものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加したい活動の種類」の関係を確認したものが図15である。

漸近有意確率(両側)

P=0.026

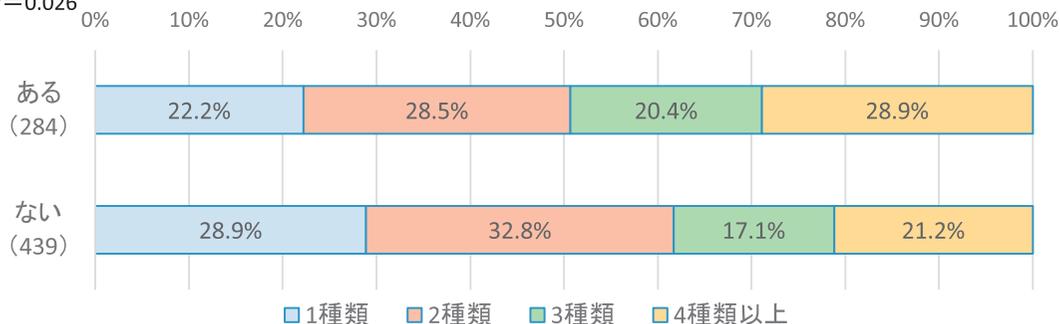


図 15 研修会などの参加経験×今後に参加したい参加活動の種類

今後に「1種類」の活動にだけ参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので22.2%なのに対して、ないものでは28.9%と1.5倍程度の違いがあり、ないもので高い(5%水準で有意)。逆に、「4種類以上」の活動に参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験のあるもので28.9%、ないもので21.2%と、1.5倍程度の違いがあり、あるもので高い(5%水準で有意)。

今後、ボランティア活動に参加したいと考えているものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加したい活動の回数」の関係を確認したものが図16である。

漸近有意確率(両側)

P<0.001

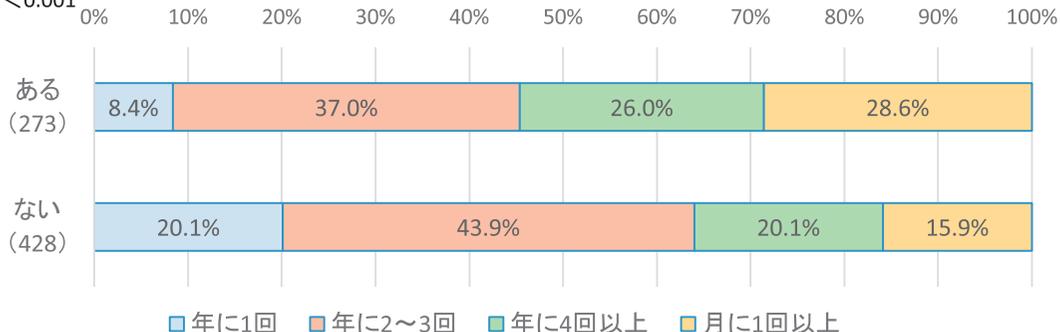


図 16 研修会などの参加経験×今後に参加したい活動の回数

今後に「年に1回」だけ活動に参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので8.4%なのに対して、ないものでは20.1%と2倍以上の違いがあり、ないもので高い（1%水準で有意）。逆に、「月に1回以上」の頻度で活動に参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験のあるもので28.6%、ないもので15.9%と、2倍近くの違いがあり、あるもので高い（1%水準で有意）。

研修会などへの参加経験があるものは、参加経験がないものに対して、今後のボランティア活動への参加意欲が旺盛で、参加したいと考えている活動の種類が多く、希望する活動の頻度も高いという傾向が確認される。

1) 研修会などへの参加によって、ボランティア活動への参加意欲が醸成されるといった影響関係を想定することも可能であるが、2) ボランティア活動参加へのモチベーションの高いものほど、研修会などへの参加意欲も旺盛であるといった影響関係も想定可能である。3) 双方方向の影響関係がスパイラル的に働いている可能性、4) 他の要素を媒介とした疑似相関である可能性、なども払拭できない。今後の研究課題としたい。

4) 過去1年間の参加経験および今後の参加の意向との関係

過去1年間の実際の参加経験との結びつきに比べて、今後の参加の意向との結びつきの方が相対的に小さいことも確認される。過去1年間に活動したものが回答者の36.5%であるのに対して、今後に活動に参加してみたいと考えているものは63.9%と、現実と意欲の間にはかなりのギャップがある。今後の参加の意向の有無と過去1年間の参加経験の有無の関係を確かめたものが図17である。

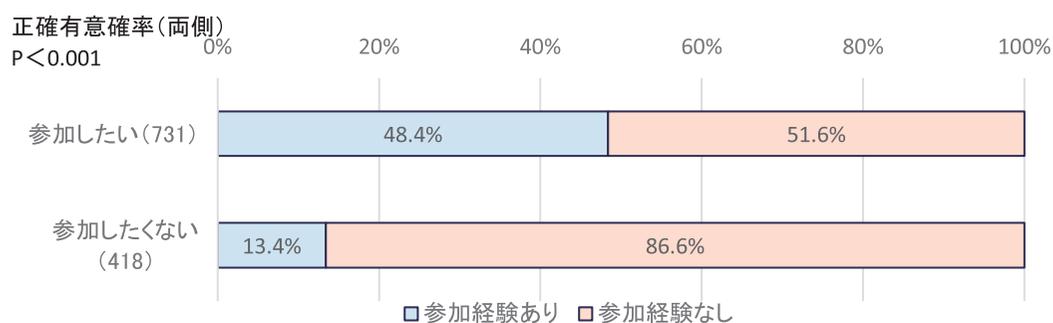


図 17 今後の参加の意向の有無×過去1年間の参加経験の有無

今後、参加したいという意向を持っているもののうち、過去1年間に参加経験のあるものは48.4%と約半数にとどまる。やってみたい気はあるのだけれど、さまざまな理由で実際の行動には踏み出せていないものが少なくないことが示唆される結果となっている。

参加意欲があるものに限定して、研修会などへの参加経験の有無と過去1年間のボランティ

ア活動への参加経験の有無の関係を確認したものが図18である。

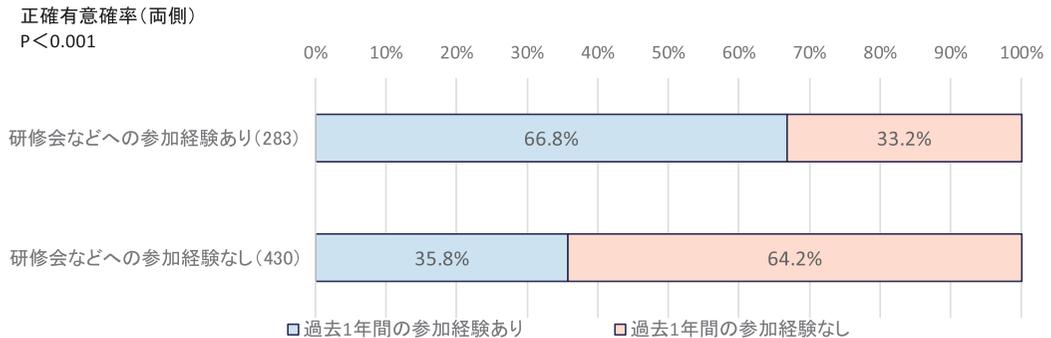


図 18 研修会への参加経験の有無×過去1年間の参加経験の有無(参加の意向ありグループ)

過去1年間にボランティア活動への参加経験があるものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので66.8%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは35.8%と、あるもので高く2倍近くの違いがあり、1%水準で有意差がある。ボランティア活動への参加に向けて一歩を踏み出すうえで、研修会などへの参加経験が後押しになっている可能性が示唆される。

5. 研修会、講演会、催しなどへの参加の経緯とボランティア活動参加の関係

1) 研修会、講演会、催しなどへの参加の経緯

今回の調査では研修会などへの参加経験のあるものに、参加の経緯について、「学校で参加」、「職場で参加」、「地域で参加」、「自発的に参加」、「その他」の選択肢からの複数回答方式(すべて選んで○)で回答を得ている。回答結果をまとめたものが図19、参加の経緯(経路)の種類について集計したものが図20である。

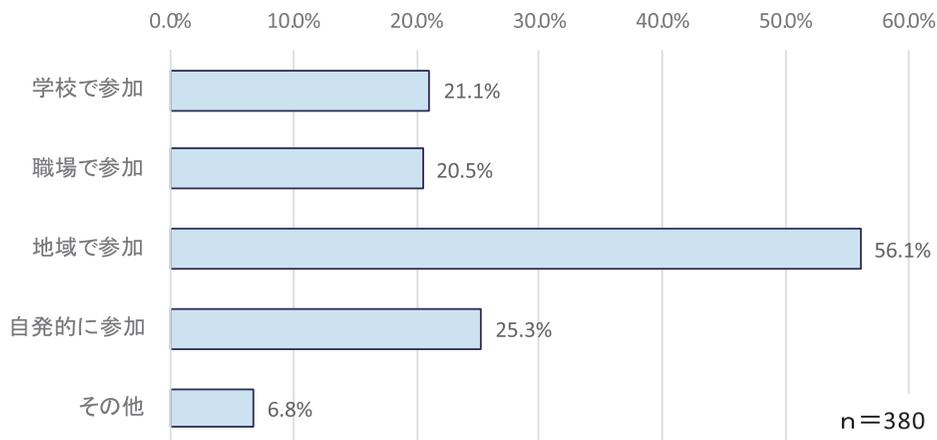


図 19 研修会などへの参加の経緯

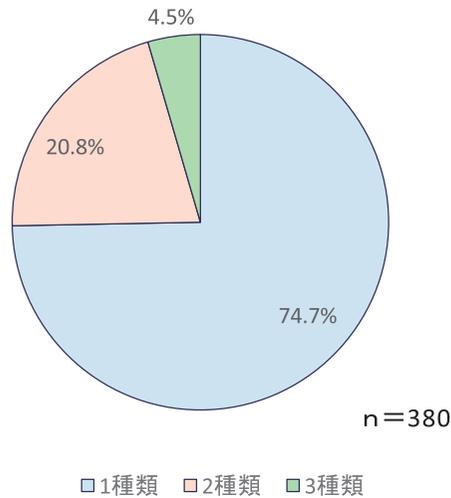


図 20 参加の経緯（経路）の種類

「学校で参加」、「職場で参加」、「自発的に参加」が、いずれも 2 割程度で大差がないのに対して、「地域で参加」は 56.1% と 5 割を超え、地域での開催を契機として参加したものが突出して多い。参加の経緯（経路）の種類に関しては、「1 種類」のものが 74.7% と大半を占めるが、「2 種類」のものが 20.8%、「3 種類」のものが 4.5% と、複数の機会に参加しているものもいる。

「参加の経緯」と性別との関係を確認したものが図 21、年代との関係を確認したものが図 22 である⁴⁾。

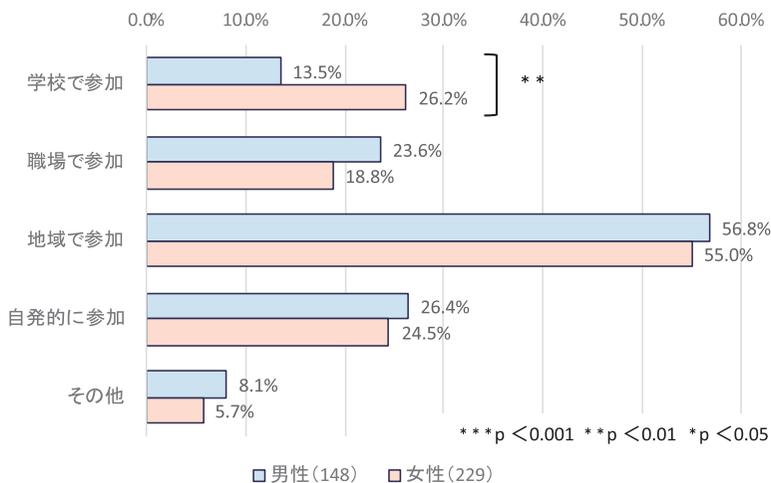


図 21 性別×参加の経緯

ボランティア活動参加と動機の付与

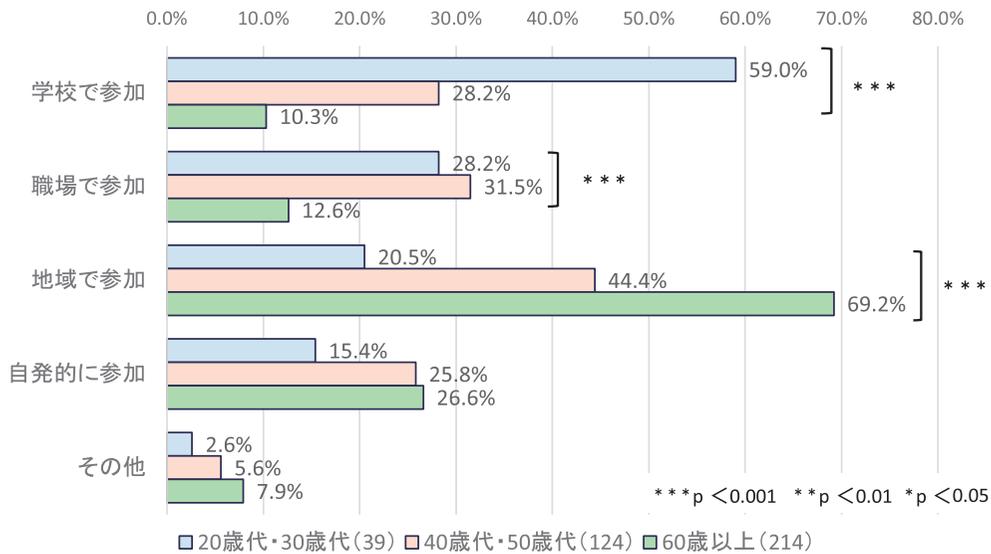


図 22 年代×参加の経緯

性別との関係について、「学校で参加」の比率は女性が1%水準で有意に高い。年代との関係について、「学校で参加」の比率は、「20歳代・30歳代」が1%水準、「40歳代・50歳代」が5%水準で高く、「60歳以上」は1%水準で低い。「職場で参加」の比率は、「40歳代・50歳代」が1%水準で高く、「60歳以上」が1%水準で低い。学校や職場でボランティア活動に関する取り組みがおこなわれるようになった時期に在学、在職していたかどうか反映されていることが推察される。「地域で参加」の比率は、「20歳代・30歳代」、「40歳代・50歳代」が1%水準で低く、「60歳以上」が1%水準で高い。地域コミュニティとのつながりの濃淡が影響している可能性が高いと思われる。

「参加の経緯（経路）の種類」との関係については、性別や年代による有意な違いはみられない。

2) 参加の経緯とボランティア活動参加の関係

研修会などへの「参加の経緯」と過去1年間の「ボランティア活動への参加経験」の関係を確認したものが図23である⁵⁾。

過去1年間にボランティア活動への参加経験があるものの比率が高いのは、「その他」を除くと「自発的に参加」の73.7%と「地域で参加」の67.6%で7割前後に達する。自発的に研修会などに参加するものは、もともとボランティア活動への興味、関心や参加意識が高いことが予想され、それが参加経験の豊富さにつながっていると考えられる。「地域で参加」の比率は、シニア層で高く、若年層で低い（図22）。塚本・舟木・橋本・永井（2021a）では、20歳代・30歳代の若年層は、他の年代に比べてボランティア活動への参加経験が乏しいことが確認されて



図 23 参加の経緯×過去 1 年間の参加経験の有無

おり、年代による行動者率の違いが影響している可能性が高い。塚本・舟木・橋本・永井（2020a）では、1）ボランティア活動の参加形態に関して、「地域の人たちと一緒に」活動しているものの比率がシニア層で有意に高いこと、2）活動場所に関して、「自分の住んでいる町内会・自治会」で活動しているものの比率が若年層で有意に低いこと、が確認されている。シニア層が、地縁的な結びつきを契機として、地域でおこなわれている研修会などに参加し、地域の知り合いと一緒に、身近な地域でのボランティア活動に参加しているといった展開も予想され、その影響で「地域で参加」で行動者率が高くなっているといった可能性も考えられる。

次に、参加形態（誰と活動したのか）や活動場所（どこで活動したのか）との関係について確認していきたい。

今回のアンケート調査では、過去1年間にボランティア活動をおこなったものに、どのような形態で（誰と）参加したのかを複数回答形式（あてはまるものすべてに○）で尋ねている。それをまとめたものが図24である。

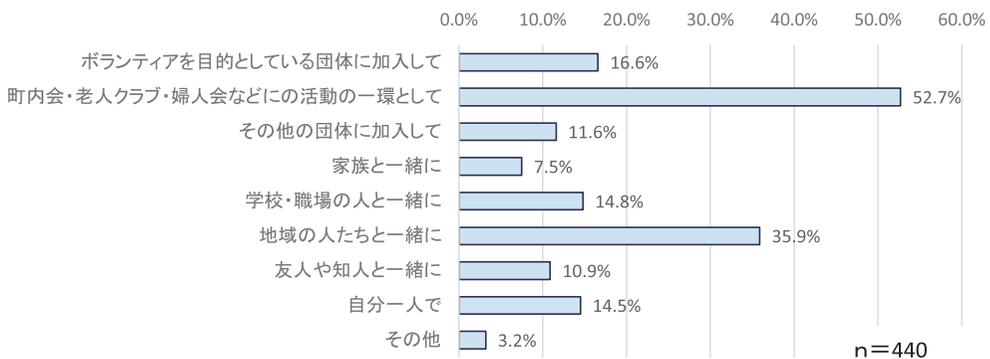


図 24 過去 1 年間の活動の形態

「町内会・老人クラブ・婦人会などの活動の一環として」参加したものが最も多く52.7%と半数程度にあたる。これに「地域の人たちと一緒に」の35.9%が続く。その他の形態で参加したものはいずれも20%に満たない。

同様に、活動の場所（どこで）に関する複数回答形式（あてはまるものすべてに○）で尋ねている。それをまとめたものが図25である。

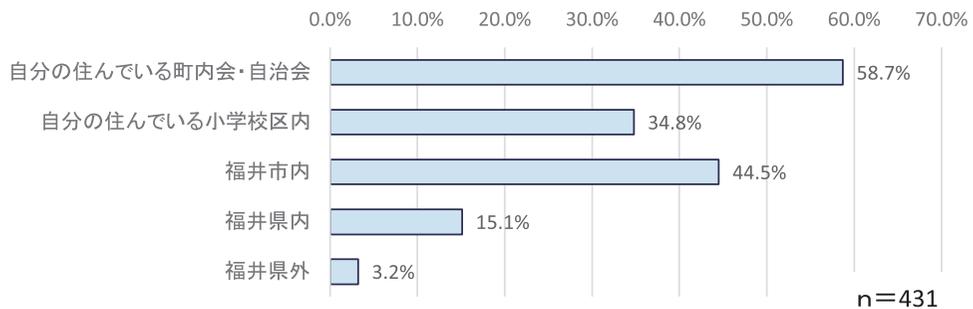


図 25 過去 1 年間の活動場所

「自分の住んでいる町内会・自治会」の比率が最も高く、58.7%と2人に1人以上にあたる。これに「福井市内」の44.5%、「自分の住んでいる小学校区内」の34.8%が続く。「福井県内」、「福井県外」といった回答の比率は低く、それぞれ15.1%、3.2%にとどまる。居住地から遠くなるに従って、参加のハードルが上がっていくといった傾向がうかがえる。遠隔地の活動に参加しようとすると、移動に要する時間的・経済的なコストなどが増大することなどが影響していると考えられる。

研修会などへの「参加の経緯」と「参加の形態」（誰と参加したのか）の関係を確認したものが図26である⁶⁾。

「その他」を除いて、どのような経緯で研修会などに参加したのかに関わらず、「町内会・老人クラブ・婦人会などの活動の一環として」参加したものの比率が最も高く、ボランティア活動参加が地縁的な集団を媒介としておこなわれていることが分かる。一方で、「学校で参加」、「職場で参加」で、他の経緯で参加したものよりも「学校・職場の人と一緒に」活動したものの比率が高い。地縁的な集団の活動の一環としてボランティア活動に参加したものの比率が最も高いのは「地域で参加」で、「地域で参加」は「地域の人たちと一緒に」活動したものの比率も高い。「自発的に参加」したものは、ボランティア活動への興味や関心、参加意欲が高いことが予想されるが、「ボランティアを目的としている団体に加入して」活動したものの比率が最も高いのはこの経緯で参加したものである。

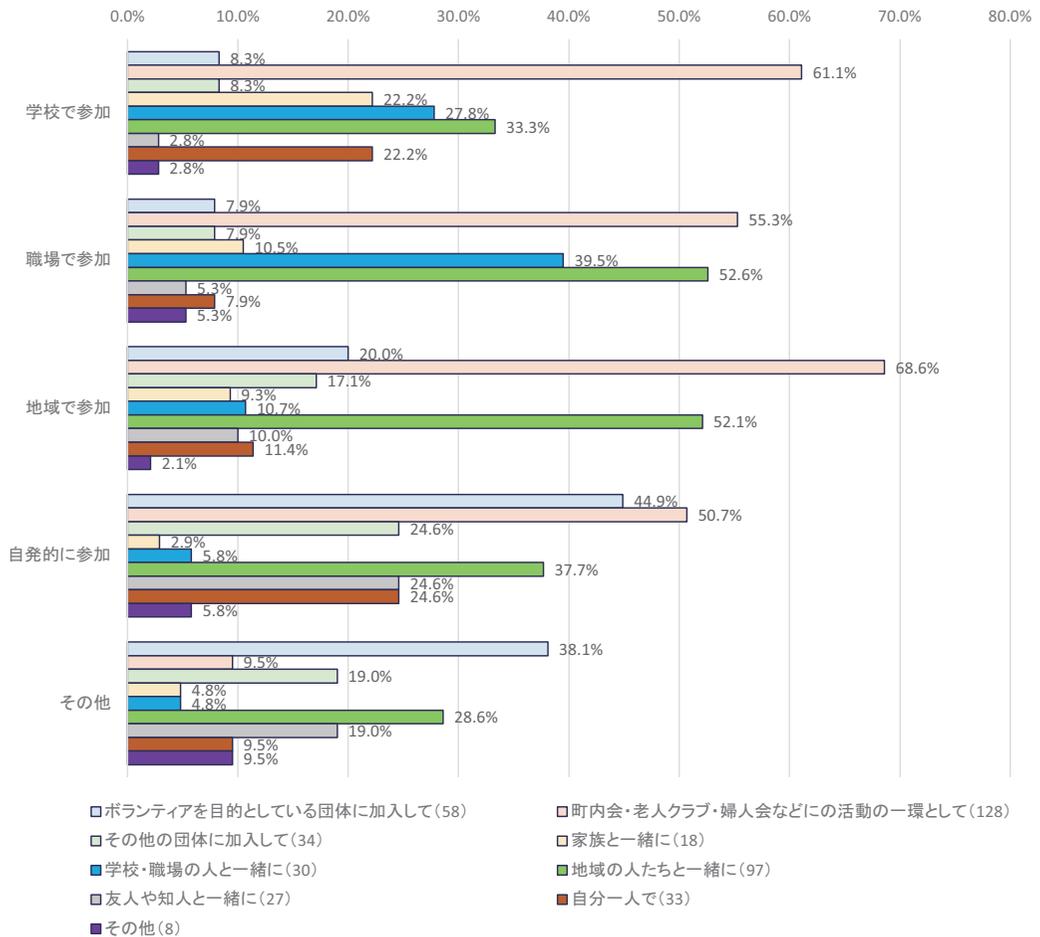


図 26 参加の経緯×参加者の形態（誰と活動した）

研修会などへの参加の経緯と参加の場所（どこで活動したのか）の関係を確認したものが図 27である。

「地域で参加」、「学校で参加」といった参加者間で生活圏の共有が予想される経緯で参加したもので、「自分の住んでいる町内会、自治会」、「自分の住んでいる小学校区内」といった身近な範囲でボランティア活動に参加しているものの比率が高く、「自発的に参加」のように興味や関心に基づくことが予想される経緯で参加したもので、より広域の「福井市内」で活動したものの比率が高くなっている。「職場で参加」のように生活圏が共有されているとは限らない経緯で参加したものに関しては、「自分が住んでいる町内会・自治会」、「福井市内」の順に活動への参加者の比率が高くなっている。

ボランティア活動参加と動機の付与

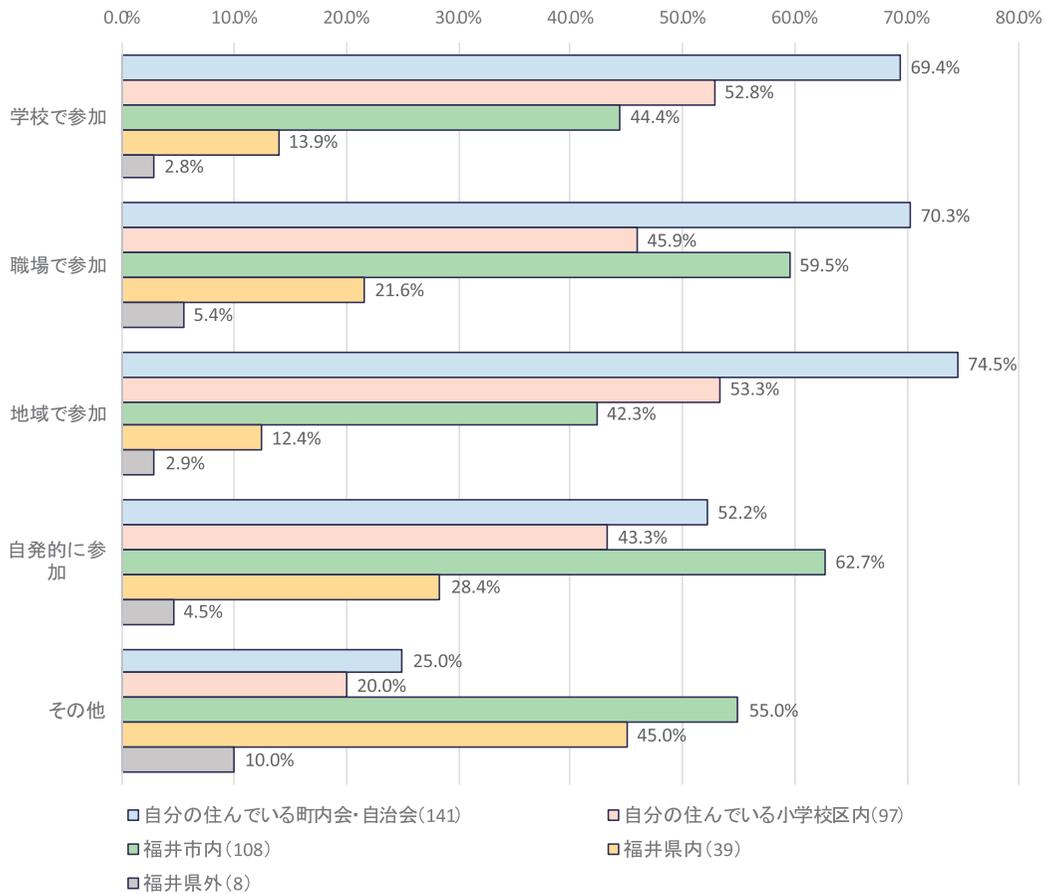


図 27 参加の経緯×活動場所

研修会などへの「参加の経緯」と「活動形態」（誰と参加したのか）や「活動場所」（どこで活動したのか）の間には、ある程度の関連性が確認される。研修会などへの参加によってモチベーションが向上し、そのことが後押しとなって参加が実現しているといった仮説に傍証が与えられていると解釈することもできる。

研修会などへの「参加の経緯」と「今後のボランティア活動への参加の意向」の関係を確認したものが図28である。

漸近有意確率(両側)
P=0.412

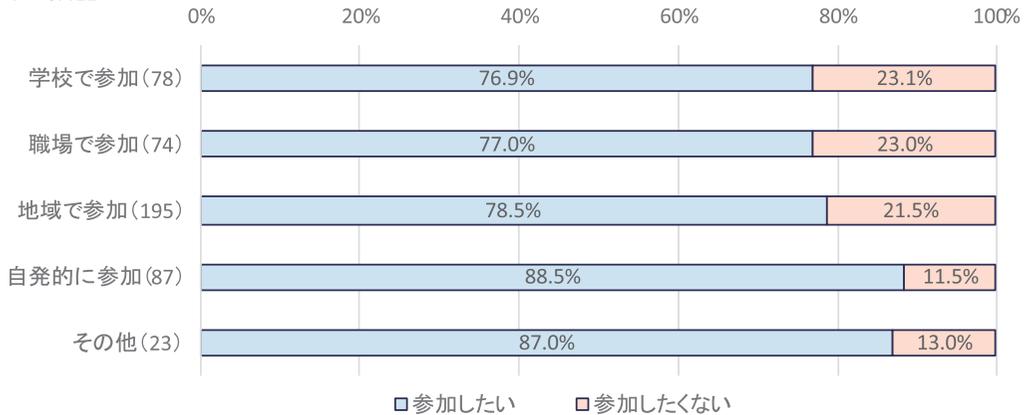


図 28 参加の経緯×今後のボランティア活動への参加の意向

「過去1年間の参加経験」とは異なり、「参加の経緯」の違いによる有意差はみられない。図14からは、研修会などへの参加によってボランティア活動への参加意欲が向上するという可能性が示唆されるが、どのような経緯で参加したのかは影響しないと考えることができる。

続いて、研修会などへの参加の経緯（経路）の種類とボランティア活動参加の関係について確認していきたい。

研修会などへの参加の経緯（経路）の種類と過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無の関係を確認したものが図29である。

正確有意確率(両側)
P=0.273

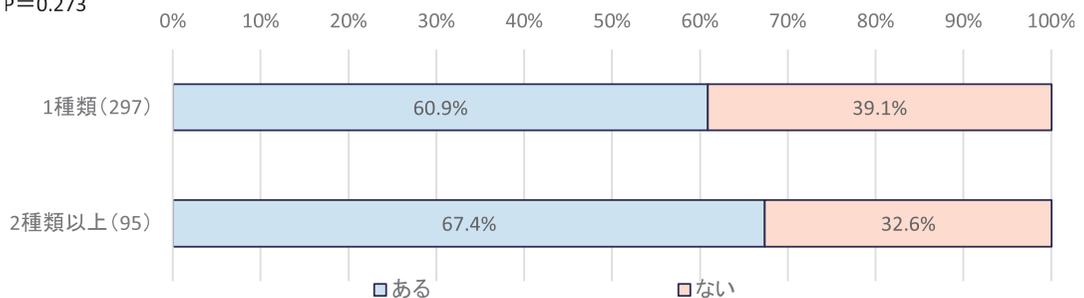


図 29 参加の経緯（経路）の種類×過去1年間の参加経験の有無

「参加の経緯（経路）の種類」の多寡と「ボランティア活動への参加経験」の間には有意な結びつきは確認されない。参加した研修会などの種類や回数によって、行動者率に差がでるわけではなさそうだ。

参加したボランティアの「活動の種類」との関係を確認したものが図30である。

ボランティア活動参加と動機の付与

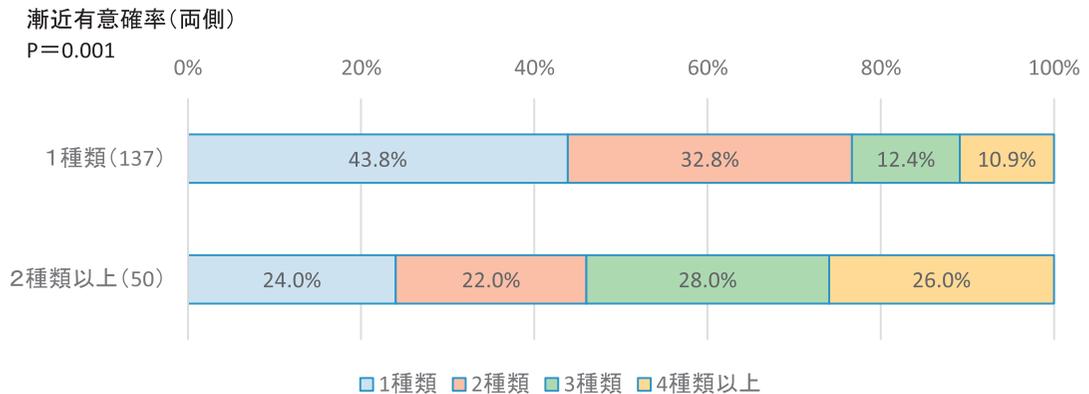


図 30 参加の経緯（経路）の種類×過去1年間の参加活動の種類

過去1年間に「1種類」のボランティア活動にだけ参加したものの比率は、「1種類」の経緯（経路）で研修会などに参加したもので43.8%なのに対して、「2種類以上」の経緯（経路）で参加したものでは24.0%で、2倍近くの違いがみられ、「1種類」の経緯（経路）ものが1%水準で有意に高い。「3種類」、「4種類以上」のボランティア活動に参加したものの比率は、「1種類」の経緯（経路）のものでそれぞれ12.4%、10.9%なのに対して、「2種類以上」の経緯（経路）で参加したものでは28.0%、26.0%で、2倍以上の違いがみられ、「2種類以上」の経緯（経路）のものが1%水準で有意に高い。

過去1年間のボランティア活動への「参加の回数」との関係を確認したものが図31である。

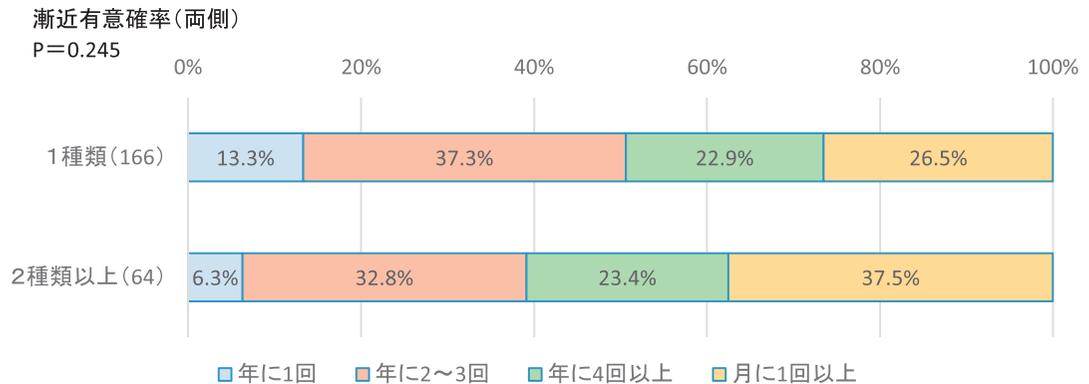


図 31 参加の経緯（経路）の種類×過去1年間の活動参加の回数

「参加の回数」との間には有意に結びつきはみられない。

「参加の経緯（経路）の種類」の多寡は、ボランティア活動に参加するか、どの程度の頻度で参加するかには影響しないが、参加する活動の種類には影響するというコントラストが確認される。複数の研修会に参加することで、複数の種類のボランティア活動の情報に触れる機会

が得られ、活動参加に際して選択肢が広がり、参加する活動の種類も増える、といった展開が推察される。

「今後の活動参加の意向」と関係を確認したものが図32である。

正確有意確率(両側)

P=0.226

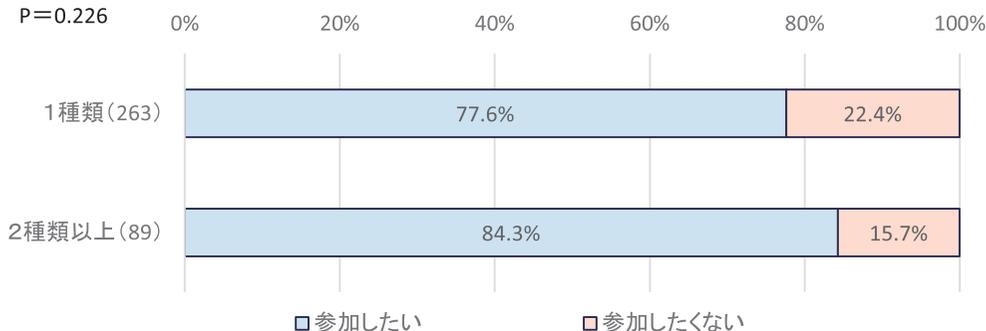


図 32 参加の経緯 (経路) の種類×今後の活動参加の意向

有意な結びつきは確認できない。同様に、今後に参加を希望する「活動の種類」や「回数」との間にも有意な結びつきは確認できない。

「研修会などへの参加経験」とボランティア活動参加の関係性の分析からは、「今後の活動参加への意向」よりも、「過去1年間の参加経験」との結びつきが大きいことが示唆されたが、研修会などへの「参加の経緯」や「参加の経緯 (経路) の種類」との関連性についても同様の傾向が認められる。

1) どのような経緯であれ、研修会などへの参加は、ボランティア活動参加への全般的なモチベーションを高める効果を持つが、2) ボランティア活動への参加が望ましいという通念も広く共有されているため、3) 実現されるかどうかは未定の今後の参加に関する意向 (低いハードル) との結びつきに比べて、4) さまざまな阻害要因がクリアされて初めて実現される参加経験 (高いハードル) との結びつきの方が、より明瞭な形で確認されやすい、といった機制が働いていることが推察される。

6. ボランティア活動への対価とボランティア活動参加の関係

以下では、ボランティア活動への対価の支払いによるインセンティブの付与が、ボランティア活動参加に与える影響について検討していく。

1) ボランティア活動への対価の支払いへの評価

今回のアンケート調査では、ボランティア活動への参加に対して対価を提供することへの賛否を尋ねている。結果をまとめたものが図33、賛成と回答したものが適切だと考える対価の範囲についてまとめたものが図34である。

「対価を支払うことへの賛否」に関しては、「賛成」のものが最も多く48.9%と半数近くを占

める。「反対」のものは20.7%にとどまり、2倍以上の違いがある。「わからない」（判断保留）のものも30.3%いる。

「適切だと考える対価の範囲」に関しては、「弁当や飲み物程度まで（現金は不適切）」と回答したものが60.6%で最も多く、これに「交通費などの必要経費まで」の26.7%が続く。「感謝のしるしとしての少額まで」、「最低賃金を下回る金額まで」といった回答は8.9%、3.7%と少数にとどまる。ボランティア活動への対価の支払いを肯定的にとらえているものであっても、弁当や飲み物の提供、必要経費の支払い程度が妥当だと考えているものが大多数をしめる。ボランティア活動のミニマムの構成要素としては、「公共性」、「自発性」、「非営利性」があげられることが多く、「非営利性」に関して広く共通認識になっていることがうかがえる。

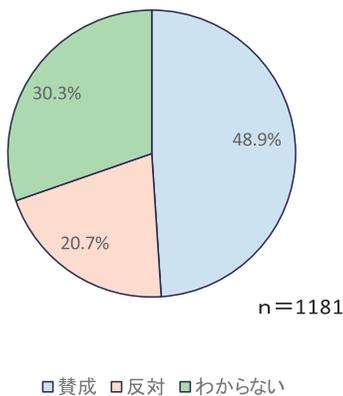


図 33 対価を支払うことへの賛否

今回のアンケート調査では、対価が支払われることで、ボランティア活動への参加意欲が高まるかどうかを尋ねている。結果をまとめたものが図35である。「高まる」が9.7%、「どちらかといえば高まる」が30.2%で、あわせると4割程度に達する。「かわらない」と回答したものが50.5%で、最も多い。「どちらかといえば低まる」、「低まる」といった回答もみられるが、あわせても1割程度と少数派にとどまる。

「対価を支払うことへの賛否」と対価の支払いによる「参加意欲の変化」の関係を確かめたものが図36である。

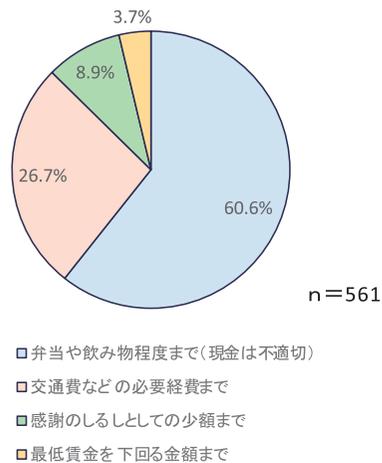


図 34 適切だと考える対価の範囲

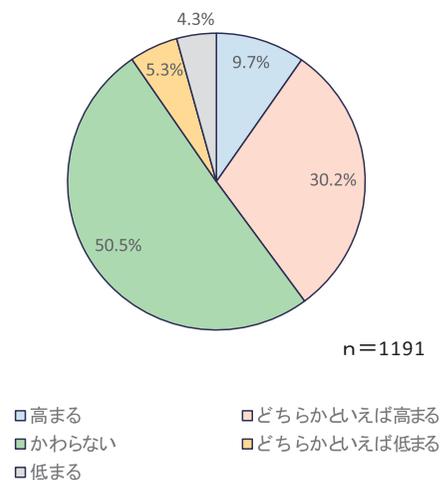


図 35 対価による参加意欲の変化

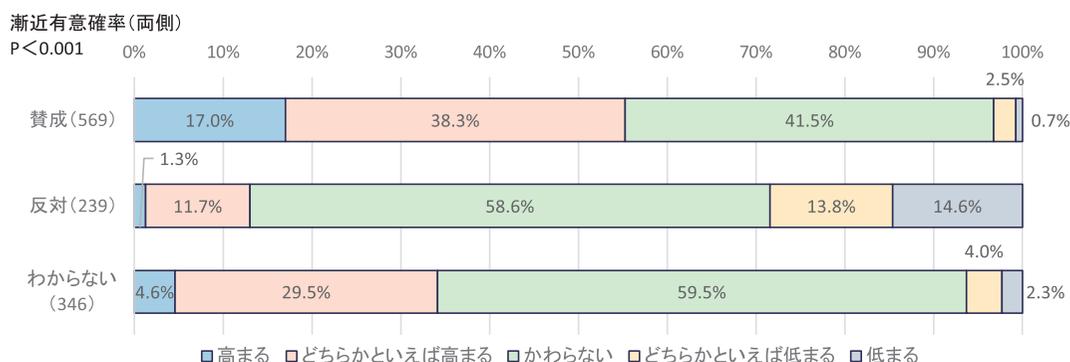


図36 対価を支払うことへの賛否×対価による参加意欲の変化

「賛成」では、「高まる」、「どちらかといえば高まる」の比率が1%水準で有意に高く、「かわらない」、「どちらかといえば低まる」、「低まる」の比率が1%水準で有意に低い。「反対」では、逆に、「高まる」、「どちらかといえば高まる」の比率が1%水準で有意に低く、「かわらない」、「どちらかといえば低まる」、「低まる」の比率が1%水準で有意に高い。「わからない」と回答した判断保留のものでは、「高まる」と「低まる」の比率が、それぞれ1%水準、5%水準で有意に低く、「かわらない」の比率が1%水準で有意に高い。

当然の結果かもしれないが、対価の支払いによって参加意欲が向上するものは「賛成」のものに多く、低下するものは「反対」のものに多い。「わからない」と回答したものでは、「高まる」、「低まる」といった極端な選択肢を選ぶものが少なく、「かわらない」という中立的な選択肢を選ぶものが多い。

「適切だと考える対価の範囲」と「対価の支払いによる参加意欲の変化」の関係を確かめたものが図37である⁷⁾。「弁当や飲み物程度まで【現金は不適切】」で、「高まる」、「どちらかといえば高まる」の比率が、それぞれ1%水準、5%水準で有意に低く、「かわらない」の比率が1%水準で有意に高い。「交通費などの必要経費まで」で、「どちらかといえば高まる」の比率が5%水準で有意に高く、「かわらない」の比率が1%水準で有意に低い。「感謝のしるしとしての少額まで」で、「どちらかといえば高まる」の比率が5%水準で有意に高く、「かわらない」の比率が5%水準で有意に低い。「最低賃金を下回る金額まで」で、「高まる」の比率が1%水準で有意に高く、「どちらかといえば高まる」、「かわらない」の比率が5%水準で有意に低い。

よりハイレベルの対価を適切だと考えるものほど、対価の支払いが参加意欲の向上につながると感じているという傾向が確認できる。一方で、図34で確認した通りハイレベルの対価を適切であると考えられるものは少数派にとどまるため、対価の支払いによるボランティア活動の活性化の効果は限定的なものであることも予想される。

ボランティア活動参加と動機の付与

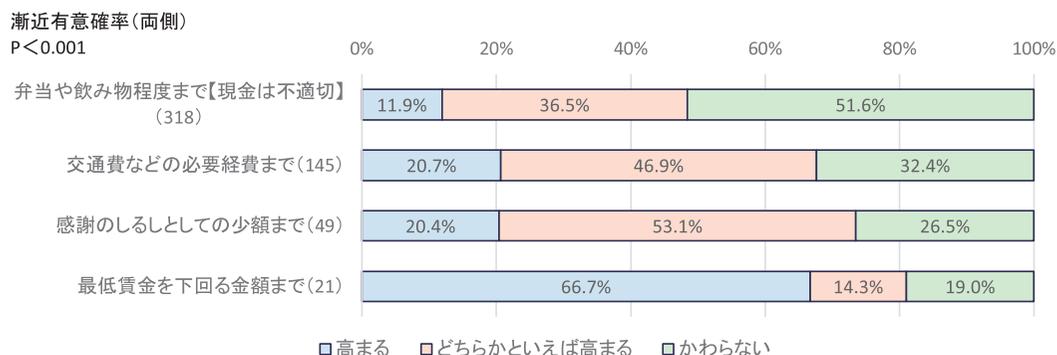


図 37 適切だと考える対価の範囲×参加意欲の変化

2) ボランティア活動への対価の評価と参加経験の関係性

「対価の支払いへの賛否」と「過去1年間のボランティア活動経験の有無」の関係を確かめたものが図38である。

「賛成」のもので、参加経験を有するものの比率が1%水準で有意に高く、「わからない」もので、1%水準で有意に低い。対価の支払いに関して賛否の判断を保留したものは、「賛成」あるいは「反対」といった明確な判断を下したものに比べて、ボランティア活動への興味・関心が相対的に薄いことが予想され、そのことが行動者率の低さに影響している可能性が推察される。

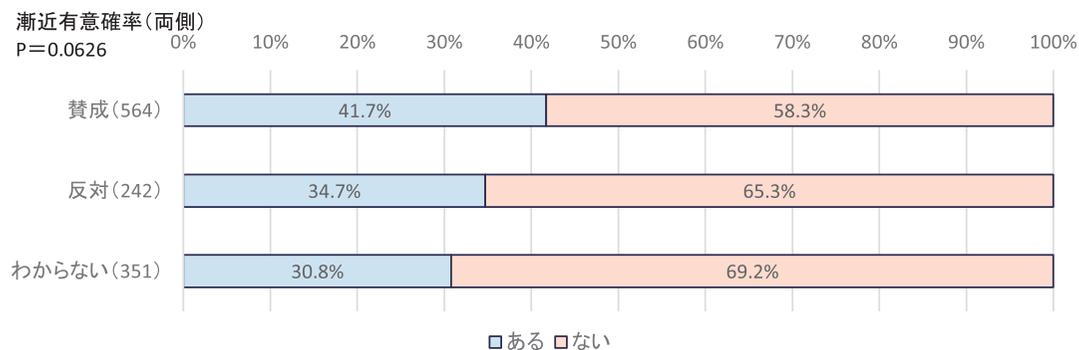


図 38 対価の支払いへの賛否×過去1年間のボランティア活動経験の有無

「対価の支払いへの賛否」について、「参加した活動の種類」、「参加した回数」との関係を確かめたものが図39、図40である。

漸近有意確率(両側)
P=0.626

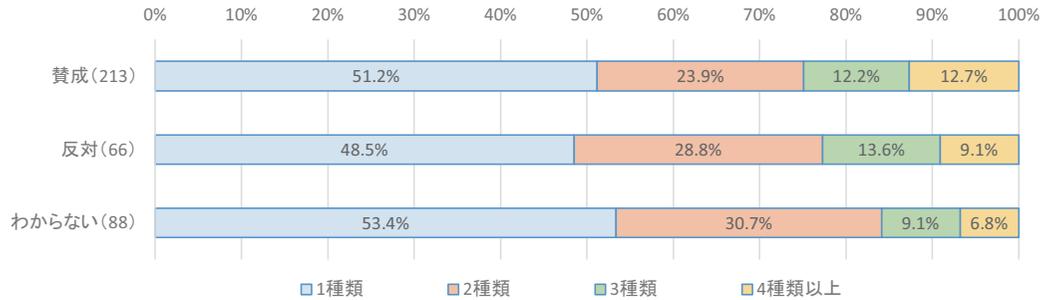


図 39 対価の支払いへの賛否×過去 1 年間の活動の種類

漸近有意確率(両側)
P=0.841

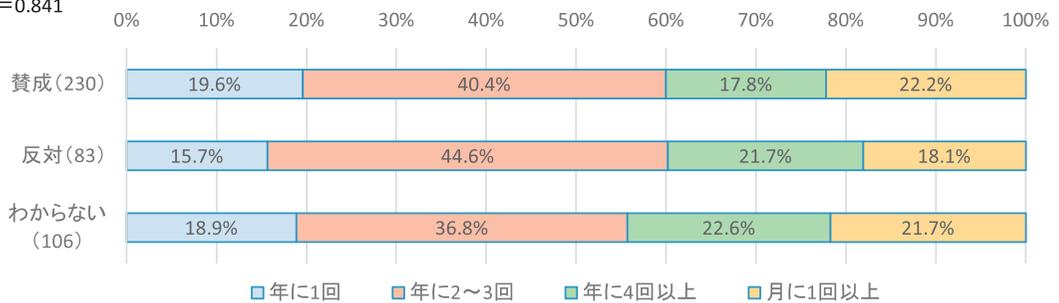


図 40 対価の支払いへの賛否×過去 1 年間の活動の回数

いずれも有意な結びつきは確認されない。対価が支払われるという条件の下での比較ではないため、あくまで傍証的な分析に過ぎないが、ボランティア活動の現状において、対価への賛否は、参加する活動の種類、回数に影響を与えてはいない。現状でも、弁当や飲み物が支給される活動、交通費やボランティア保険の加入費用などが補填される活動は存在するが、対価の支払いを評価するものがそうした活動を選んで積極的に参加しているわけではなさそうだ。

「適切だと考える対価の範囲」と「過去 1 年間のボランティア活動経験」の有無の関係を確かめたものが図41である。有意な結びつきは確認されない。ボランティア活動の種類、回数の間にも有意な結びつきは確認されない。

ボランティア活動参加と動機の付与

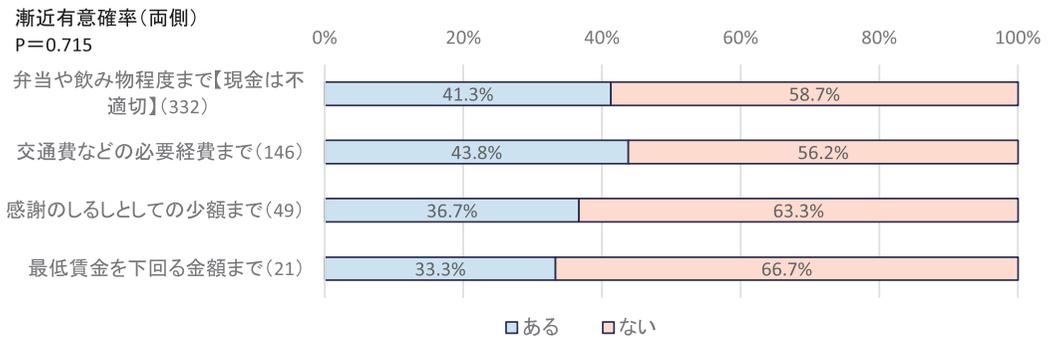


図 41 適切だと考える対価の範囲×過去 1 年間の参加経験

「対価の支払いによる参加意欲の変化」と「過去 1 年間のボランティア活動経験の有無」の関係を確かめたものが図 42 である。有意な結びつきは確認されない。ボランティア活動の種類、回数の間にも有意な結びつきは確認されない。

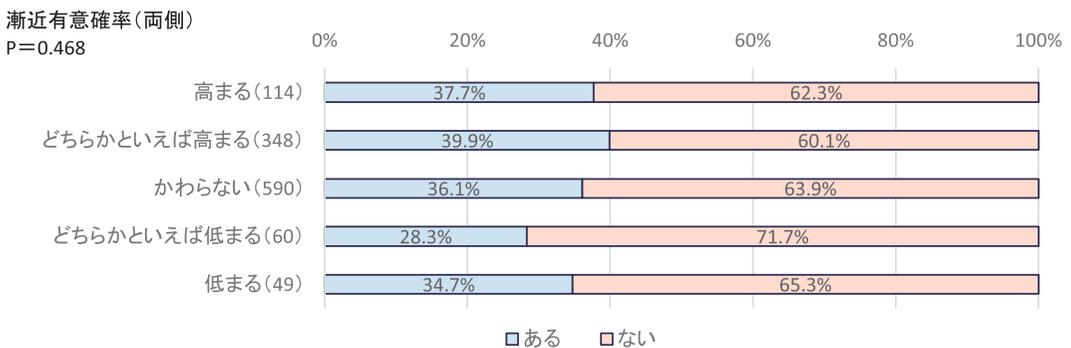


図 42 対価の支払いによる参加意欲の変化×過去 1 年間の参加経験

対価が支払われるという条件の下での比較ではないため、やはり傍証的な分析に過ぎないが、対価の支払いによるボランティア活動の活性化の効果は限定的であることが推察される。

7. まとめ

ボランティア活動の活性化のための施策や取り組みの効果について、1) ボランティア活動に関する研修会などを開催し、具体的な活動の内容や方法、やりがいや楽しさ、社会的な意義などを紹介し、意識啓発を通して、参加意欲の向上を目指す内的な動機付けに照準したモチベーション・アプローチ(内側からの動機付け)と、2) 活動への参加になんらかの対価を付与するといった形で、外的な誘因によって参加を引きだそうとするインセンティブ・アプローチ(外からの動機付け)、に大別して検討した。

モチベーション・アプローチ(内側からの動機付け)に関しては、因果関係の検証という意

味で課題が残るが、1) ボランティア活動に関する研修会などの開催、2) 研修会などへの参加、3) 参加意欲の向上、参加の仕方や活動の方法に関する知識やノウハウの習得、4) ボランティア活動への参加、といった経路で、活性化につながっている可能性が示唆された。

インセンティブ・アプローチ（外からの動機付け）に関しては、よりハイレベルの対価を適切だと考えるものほど、対価の支払いが参加意欲の向上につながると感じているという傾向が確認されたが、ハイレベルの対価を適切であると考えられるものは1割程度と少数派にとどまる。ハイレベルの対価を支払ったとしても、ボランティア活動の活性化に与える効果は限定的なものにとどまることが予想される。

本稿では動機づけとボランティア活動参加の関係に照準した分析をおこなったため、ボランティア活動参加に影響することが予想される他の要因との総合的な関連性の中でのモチベーション・アプローチ、インセンティブ・アプローチの働きや効果については検討できていない。今後の研究課題としたい。

謝辞

本稿で使用したアンケート調査の実施、データの収集、分析にあたり、科学研究費助成事業の基盤研究（C）（一般）の助成を受けた（課題番号：17K04214）。本研究は福井市総合ボランティアセンターとの共同研究として実施されたものである。仮説の設定、調査票の設計の段階からアイデアを出し合って調査・研究プロジェクトを進めてきた。サンプリングの実施にあたっては多大なご尽力をいただいた。サンプリングの実施にあたっては福井市、草津市の関係部署にご協力をいただいた。本稿で使用したデータが収集できたのは、福井市、草津市の一般住民の皆さまのご協力があったからである。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 住民基本台帳を抽出台帳として単純無作為抽出法で実施した。
- 2) ボランティア活動に関する調査・研究では、ボランティア活動の定義が問題になる。今回の調査では、ボランティア活動に関して、一般的に指摘されるミニマムの構成要素としての「公共性」、「自発性」、「非営利性」を前提した定義を採用した。調査票の冒頭部分において、「ボランティア活動」とは、自分の本来の仕事（家事や育児、介護、学業などを含む）とは別に、他人や社会のために、自分の時間や労力を、自発的に（なんらかの強制によるのではなく）、営利を目的とすることなく、提供する活動のことを指します」と定義を明示したうえで、回答を求めている。
- 3) カイ2乗検定の結果（漸近有意確率、正確有意確率）については図中に示し、どの部分に有意な差がみられたかについては、残差分析の結果に基づいて本文中に記載する。基本

的に以下同様であり、それ以外の場合には注で個別に説明をおこなう。

- 4) 有意差に関する記述は、性別との関係については正確有意確率（両側）、年代との関係については漸近有意確率（両側）、に基づいている。
- 5) 「参加の経緯」に関して、複数回答式（あてはまる番号をすべて選んで○）による回答であるため残差分析はおこなっていない。
- 6) 「参加の経緯」、「参加の形態」ともに、複数回答式（あてはまる番号をすべて選んで○）による回答であるため有意差の検定はおこなっていない。
- 7) 「対価の支払いによる参加意欲の変化」に関して、「どちらかといえば低まる」、「低まる」といった回答が少なく、データ数の関係から、そうした項目を含めて分析を進めると、期待度数が5未満のセルの割合が高くなり、有意差の検定を適切に実施できなくなる。そのため上記の項目を除いた形で分析をおこなっている。

参考文献

- 福井県立大学ボランティア研究会【塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・小林明子】（2014）『アクティブシニアのボランティア活動参加に関する研究』福井県立大学地域貢献研究・平成24～25年度調査研究報告書
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子（2017）「アクティブシニアのICT利用とボランティア活動－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から3－」『福井県立大学論集』49:1-14
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子（2023）「高齢者のインターネット利用とボランティア活動－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』59:1-14
- 桜井政成（2002）「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析－京都市域のボランティアを対象とした調査より－」『ノンプロフィット・レビュー』（日本NPO学会）2-2：111-122
- 桜井政成（2005）「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー』（日本NPO学会）5-2：103-113
- 総務省統計局（2011）「平成23年社会生活基本調査－生活行動に関する結果－ 結果の概要」<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf>
- 総務省統計局（2016）「平成28年社会生活基本調査－生活行動に関する結果－ 結果の概要」<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>
- 塚本利幸（2011）「福井県における社会活動参加の現状と課題」『ふくい地域経済研究』13：43-60
- 塚本利幸（2012）「ボランティア活動参加とジェンダー」『日本ジェンダー研究』15：65-79
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子（2016a）「アクティブシニアのボランティア活動参加と基本属性－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から1－」『福井県立大学論集』47:19-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子（2016b）「アクティブシニアのボランティア活動の参加の様態－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から2－」『福井県立大学論集』47:45-73
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子（2017）「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』49:15-44

- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2018) 「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 5－」『福井県立大学論集』50:27-58
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2019) 「アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 6－」『福井県立大学論集』52:59-87
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2020) 「アクティブシニアのボランティア活動参加の規定要因の総合的分析－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 7－」『福井県立大学論集』54:17-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2021a) 「ボランティア活動参加と基本属性 1－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から 1－」『福井県立大学論集』56:33-61
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2021b) 「ボランティア活動参加と基本属性 2－草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から 1－」『福井県立大学論集』56:63-93
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2022a) 「ボランティア活動参加の様態の検討 2－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から 2－」『福井県立大学論集』58:53-83
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2022b) 「ボランティア活動参加の様態の検討 2－草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から 2－」『福井県立大学論集』58:85-115
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2023b) 「ボランティア活動参加と動機の付与 2－草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から 3－」『福井県立大学論集』60:75-102
- 塚本利幸・小林明子・酒井美和 (2013) 「混住化地域の近隣関係における互酬性－福井市の事例から－」『福井県立大学論集』41:13-38
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2002) 「環境ボランティア活動への参加と生活経験」『福井県立大学論集』21:39-55
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2004) 「環境ボランティア活動の多様性と参加の規程要因－参加意欲と参加経験のギャップをめぐって－」『福井県立大学論集』23:73-90
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2012) 「ボランティア活動参加と地域活動参加、近隣交際の関連についての考察－福井市の事例から－」『ふくい地域経済研究』15:15-36
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012a) 「地域環境保全活動への参加と社会関係資本－滋賀県守山市の NPO 法人「びわこ豊稔の郷」を事例にして－」『環境社会学研究』18:155-166
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012b) 「地域環境 NPO の会員の年齢層と参加の様態－滋賀県守山市の NPO 法人「びわこ豊稔の郷」を事例として」『京都府立大学学術報告 (公共政策)』4:73-88
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2015) 「地域環境 NPO 会員の社会関係資本と参加の様態－NPO 法人「びわこ豊稔の郷」の会員構成の変化をめぐって」『水資源・環境研究』28-2:149-158
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資 (2017) 「地域環境 NPO の展開プロセスと参加層の変化－NPO 法人「びわこ豊稔の郷」の会員アンケート調査の 3 時点比較－」『水資源・環境研究』30-2:66-72
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資 (2017) 「地域環境 NPO における社会運動性と事業性－NPO 法人「びわこ豊稔の郷」の展開プロセスと会員の参加の様態をめぐって－」『京都府立大学学術報告、公共政策』9:39-58